

「合併せず」の長野県泰阜村長語る

よりどころ失うと 地域はさまざまよう

北本で自立のまちづくり研究大会

生涯学習のまちづくりについて研究する「自尊・自立のまちづくり研究大会」がこのほど、北本市立文化センターで開かれた。県内外から、まちづくりにかかわる住民や自治体職員など約八十人が参加。自立したまちづくりを実現するた

め、生涯学習の果たす役割について議論した。大会は、社会教育や公民館運営に携わる関係者で組織する「生涯学習推進ネットワーク協会」(田中一郎会長)と生涯学習にやるまちづくりを支援するNPO法人「全国生涯学習まちづくり研究会」

(代表・福留強聖徳大学教授)の共催。

合併せず自立したまちづくりを進めている長野県泰阜(もすおか)村の松島貞治村長を招いての鼎(てい)談と分科会が行われた。鼎談は松島村長、福留さん、北本市在住で生涯学習プロデューサーの工藤日出夫さんの三人で行われた。

同村は、長野県の最南端に位置する。十九の集落が山間に点在し農林業が中心の典型的な過疎の山村で人口は約二千二百人。二〇〇四年四月に、合併せず単独で行政運営をしていく方針を決定。高い高齢化率を背景に、在宅サービスの無料化など在宅福祉のまちづくりを進めてきた。

松島村長は「戦後の行政は都市に追いつくと開発型の行政だったが(都

市に)勝ってないことが分かってきた。生涯学習は、地域を尊敬していく活動だ」と話した。

さらに、過疎により人口が減りまちづくりを担う人材が流失していることを指摘。「役所主導でまちづくりをやるしかない。しかし、日本の繁栄を築きいろいろな知恵を持つている団塊世代のリタイア組の二、三割は田舎に帰って来ると思っている」と期待した。

工藤さんも「団塊の世代はまちづくりの大きな戦力になる。地域とのかかわりが薄いの世代を地域の中でどう自立させていくかが生涯学習の課題」と指摘した。

福留さんも「団塊の世代は仕事一筋で地域から浮き上がっている。地域で気軽に話したまり場づくりが必要」と強調。

松島村長は合併に触れながら「合併しないのは、役所がなくなることで人々の心のよどみがなくなるから。よどきを失ったら地域は苦しい。財政は苦しいが、いい地域を次世代に残せれば役目は済む」と次世代を考えたまちづくりを

提唱した。また、三つの分科会開催。シニアの地域参加コミュニティ・ヒジメなどテーマに事例発表と意見交換を行った。



松島泰阜村長を招いた行われた鼎談＝市立文化センター